

柳井正著「現実を視よ」PHP 研究所、2012年10月4日刊を読む

### 企業人が「ステイツマンシップ」を発揮するとき

1. あえてドン・キホーテになろう——冒頭で私はそう述べた。しかしほんとうなら、そうした“ドン・キホーテ”がもっとたくさん出てきていいはずではないか。
2. 一年間に数え切れないほどの経営者に私は会う。政治談議に花が咲くと、ほとんどの人が「まったく、そのとおりだ！」と言う。
3. しかし、公の場で彼らはそうした話題を出さない。平時であれば、それでもいい。しかし、時は有事である。日本という国が三等国に落ちようかというときに、「何も発言しない」という選択肢があるだろうか。
4. 「国の補助で事業をやって成功したためしはない」
5. かつて本田宗一郎はこう言って、産業政策に介入しようとする政府や官僚たちに真っ向から勝負を挑んだ。ホンダがいまのような大企業になってからの話ではない。当時、彼にあったのは夢であり、志だけであったかもしれない。
6. 戦後の荒廃から日本を立ち直らせた主人公は、政治家でも官僚でもない。本田のような企業人たちであったはずだ。
7. いまこそ企業人は真の「ステイツマンシップ」を発揮して、政治家や官僚に戦いを挑み、再び荒廃したこの国を救う責任があるのではないか。

P172 ~ 173

#### [コメント]

ビジネスの世界から国家のことを考え、行動する人のことをビジネス・ステイツマンというそうだ。ファーストリテイリング、ユニクロの柳井社長は、志高い企業人こそが日本を立ち直らせる主人公になるべきだと説く。その通りだと私も考える。

— 2012年10月19日 林 明夫記 —